

# 第一章 何故ヨーロッパへそして出発まで

## 一、ナホトカ〜ハバロフスクの寝台列車

一九七五（昭和五十）年四月二十一日の夜、私はナホトカからハバロフスクへと向かう寝台列車の中にいた。ついさつきまで、今回のヨーロッパへと向かうグループツアー——当時、日本からヨーロッパに入る最安値のツアーで横浜〜ナホトカ〜ハバロフスク〜モスクワ〜ウイーン経路（ウイーンで解散）のツアー——のメンバーたちと雑談していたが、夜も更けてきてそれぞれが割り当てられた寝台に分かれていた。

車窓から、明るいうちは林や荒涼たる草原が見えていたが、今は真つ暗で、列車の「ゴットン、ゴットン」という音が聞こえるのみだった。いくばくかの不安はあるが、私はこれから先の旅路について心を躍らせ、この旅行を思い切つて実行したことを良かったと思っていた。そして、この旅に就くまでの経緯を思い起こしていた。

## 二 そうだ、ヨーロッパへ行こう

私は七月下旬の生まれだが、気のせいかな誕生日が近づく梅雨どきは、よく気分が落ち込むことが多かったように思う。特に、一九七四（昭和四十九）年の梅雨期はひどかった。福岡市にある大学の卒業を間近に控え、社会に出ることに不安を抱いていた時



車窓からの眺め



寝台列車の中で

に、在籍していた研究室の助手に空きが出て、研究室のT教授から声を掛けていただき、そのおかげで採用され給料を頂いていた。しかし、その二年間も終わりに近づき、モラトリアムの最後も迫ってきていた。その影響も大きかったと思うが、とにかく、この年の六〜七月のメランコリーはひどかった。

この気分から逃れるために、少しの間、実家のある長崎県北松浦郡福島町（現在、松浦市福島町）へ戻ってみようと考えた。しかし、一人で帰ることに不安を覚え——そのくらい落ち込み方がひどかった——未だ学生だった友人のH君に実家までの同行をお願いした。

引き受けてくれたH君とともに実家の両親の元に戻り、しばらく滞在した。H君を遊びに誘う元気も出てきたか、伝馬船（手漕ぎの小舟）を借りて二人で家の前の海へ雑魚釣りに出掛けた。キスやベラ（クサビと呼んでいた）を狙ったと思う。家から一〜二時間ほどの海上にいたが、丁度、梅雨明けと重なり、空は一機に夏空になっていた。青空に入道雲が沸いてきた空であった。その空を見ながら、突然、助手の二年間を終えたならヨーロッパを旅しようとの考えが、それこそ降りてきた。そして、できれば、カミュの『異邦人』（後述）の舞台のアルジェリアまで足を延ばしてみようと考えた。すると、急に目の前が明るくなり、憂鬱な気分は一機に吹き飛んだ。もう一度、猶予の期間を設け、新しい可能性を含む進路を考え、自分を試す機会を設けることとした。この時の夏空は決して忘れない。

こうして、一九七五（昭和五十）年の三月までに、ヨーロッパ旅行の計画を立て、英会話を勉強し、お金を貯め、体も鍛えることにした——鍛錬のためには空手の道場に約半年間通った。ひ弱な自分を意識していたし、ブルース・リーの『燃えよドラゴン』が大人気を博していた年だった——オチャ！……

1 大江健三郎『日常生活の冒険』に出てくる冒険家・哲學家の斎木犀吉のイメージがびつたりと勝手に思っていた友人。犀吉とは違い寡黙なタイプではあったが、私の結婚式以来会っていない。真夏の夜、二人で大学近くの小学校のプールに塀を乗り越えて忍び込み、素っ裸で泳いだ。ささやかな冒険だった。この小説の最後に出てくる「ともかく全力疾走、そしてジャンプだ。錘のような恐怖心から逃れて！」は、若い頃に背中を押してくれた言葉。犀吉のモデルが伊丹十三とは、ここ頃は知らなかった。

2 ブルース・リーの気合の声。リーは、この映画のヒットの後も世界中で愛され続けたが、後に述べるアルジェの海岸で少年たちからリーの横蹴りのポーズを求められた。上手くはなかったが少し喜んでもらった。ブルース・リーが好きだった飲み物は？ ↓「お茶」オチャ」。三十年後か会社人間になってから、中国での仕事で一緒だった人から教えたもらったジョーク。

### 三 トーマスクックの時刻表とユーレイルパス

冒頭にも書いたがガイドブックなどによると、当時、日本からヨーロッパに入るには、横浜から海路でナホトカに入り、シベリア鉄道またはアエロフロートを利用することが最安であった。ナホトカ航路<sup>3</sup>を利用する入り方である。そして、ヨーロッパ内を格安でしかも快適に回るには、ユーレイルパス（ヨーロッパ内の鉄道を自由に乘れるカード）を購入する方法が最も良いとされていた。そこで、福岡市内の旅行会社に行き、横浜からソビエト経由のグループツアーに申し込んだ。このツアーは、ウイーンで自由解散になるツアーであった。ヨーロッパで何か仕事を見つけ長期滞在する考えも頭には少しあったが、帰ってくることを前提にパリ発の帰りの航空券も購入した。

そして、ガイドブックやトーマスクックの時刻表を見ながら、大筋のルート・日程を定めた。そのルートは経路図に示すとおりであり、モスクワ、ウイーン、ベニス、ローマ、ナポリ、アテネ、フィレンツェ、マルセイユ、アルジェとオラン、マドリッド、バルセロナ、スイスのツェルマット、アムステルダム、ケルンそしてパリである。アルジェリアを除けば、教科書に出てくる有名なスポットを見て回るといって、観光名所めぐりという意味合いが中心の計画であった。しかし、それらをこの目で見て、その先の自分の考え方や社会人としての進路に及ぼす影響を知りたいと思ったし、同級生らが就職していくなかで、この時期に自分らしい何かの足跡を残したいとの気持ちがあった。かっこ付けて言えば自分を試したかかったとなるが、やはりモラトリウムというところであったと思う。

ギリシアからさらに東方のイスタンブール、北欧のデンマーク・スウェーデンは、治安、物価などから現地で判断するこ

3 日本とソビエト連邦（現・ロシア）のナホトカ港を連絡していた航路である。戦前から活用され、1991年、ソビエト連邦の崩壊に伴い翌年に廃止された。『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2023年6月15日（木） 18:01 UTC

URL: <https://ja.wikipedia.org/wiki/ナホトカ航路>

4 時刻表の見方は、父が学校の事務職であったことから詳しく、素早く見る方法を教えてくれた。トーマスクック社の時刻表は英語版であったが、時刻表の見方は通用した。なお、父は、写真が趣味の一つであり、旅行の計画を聞くとカメラの使い方を丁寧に教えた。そして一眼レフのカメラをくれた。

ととした。

中学生の頃からのビートルズ<sup>5</sup>の大ファンであったため、イギリスへ渡るとはかなり考えたが、当時、食べ物がまずいとの情報が出回っていたし、ユールレイルパスのルートから外れているので計画には入れなかった。今思えば、イギリスへ行かなかったことには悔いが残っている。

#### 四 『異邦人の』舞台・アルジェと『ペスト』の舞台・オラン

同年代の方や文学好きな方は、アルベル・カミュのことはよくご存じと思うが、カミュは、私らの時代のキーワードの一つ——不条理をテーマにした作家である。その代表作の一つが『異邦人』で、アルジェリアの首都アルジェが舞台となっている。主人公・ムルソーが海岸で動機があるように思えない殺人を犯し、死刑になるといったストーリーである。哲学的な意味は理解できないものの、そこに描かれている海岸の情景や牢獄で感じた夜・大空・潮のにおいの描写、そして主人公が自分に忠実なところが特別に好きだった。そのアルジェの海岸を一度は見てみたいと思っていた。さらに、もう一つの代表作は『ペスト』——ペスト流行に立ち向かう医者・リウー他が奮闘する姿などを描いた小説。今回のコロナ禍で類似の状況の一つとして再び注目された——であるが、こちらの舞台は、アルジェから西へ列車で五時間程度の中都市・オランである。この作品は、ペストによる災禍の始まりから終結までの模様や人々への考察が丹念に描かれている大作だが、私は話の

5 ビートルズは既に解散していた。1972頃から吉田拓郎や井上陽水が人気だった。1974のレコード大賞は『襟裳岬』。これは拓郎が作曲。ビートルズは、中学2年生（1964年）の頃、同級生のY.S君が教えてくれた。彼は、イキナ・ハデナ (It's been a hard day's night) という歌っていた。それ何？と訊いたら色々教えてくれた。佐世保での高校生の時は、雪が積もった校庭に誰かがHELPと大きく描いたとの話を聞いた。ビートルズは不適切な音楽とされていた。

筋や人物描写よりも、当時は、主人公が友人・タルーと夜の海での海水浴をするシーンが特に気に入っていた。このような理由で、アルジェリアは、この旅の大きな目的地の一つとしていた。

## 五 持ち物チェックリスト

旅行に携帯するもののチェックリストが残っていたので紹介したい。特に大切なパスポートは、市販のケースに胸から下げ、<sup>6</sup> するための紐を母に作ってもらい、肌身離さず携帯した。

そのひも付きの入れ物は、その後の一人旅行の時にも大いに役立った。この旅からおおよそ二十年後、バンクーバーでの学会に参加する際に、経由地のサンフランシスコの海岸でボディボード<sup>6</sup>をした際に、手荷物（大きな荷物は空港に預けていた）をロシア系の運転手に預けたが、パスポートと現金だけは万一を考え、このひも付きケースに入れ胸から下げ、その上にウエットスーツを着て、海に入ったことを思い出す。まったく濡れなかった。そして、運転手は約束通り待っていてくれた。

6 サーフインの一種で、基本は腹ばいで波に乗る遊び。四十代の半ばから始めた。上手くはないが、海外はサンフランシスコの他、ハワイ、韓国、台湾、イラン（カスピ海）などでの経験がある。現在は、ふつうのサーフィンの一種のロングボードに未だ挑戦中である。ホームポイントは、糸島市の野北海岸や幣の浜。

- ✓ 旅券(子附注 財証明書)
  - ✓ ① ユーレイルパス
  - ✓ ② その他の切符 (里りの航空券)
  - ✓ ③ 旅行小切手
  - ✓ ④ エースホテル会員証
  - ✓ ⑤ JISV会員証
  - ✓ ⑥ 現金
  - ✓ ⑦ 旅行保険証
  - ✓ ⑧ 印金錠
  - ✓ ⑨ 戸籍抄本
  - ✓ ⑩ 写真
  - ✓ ⑪ 靴(3)
  - ✓ ⑫ 履物
  - ✓ ⑬ ヴァンパイア
  - ✓ ⑭ ヤマ(33で、あうせ)
  - ✓ ⑮ セーター
  - ✓ ⑯ ジャケット
  - ✓ ⑰ シャツ(ホタテウニ(券) 30)
  - ✓ ⑱ チョッキ(毛と襟)
  - スラフス(2本)
  - ⑲ 下(3足)
  - ✓ パンツ(3組)
  - ✓ 下着(毛ソテ2枚 半そで1枚)
  - ✓ Tシャツ
  - ✓ ⑳ 靴下
  - ✓ ㉑ (スリッパ)
  - 洗面具 (タオル2枚 歯ブラシ 歯かき 石けん、シャンプー、ビケソリ、くし)
  - 洗濯用具 (洗濯石けん、ロープ、フリップ、空身ハンカチ)
  - 小物 (針と糸、ツイタリ、ハサミ、セリ指andカニタリ、セロテープ、カギ)
  - 筆記用具 (ボールペン、メモ帳、ノート)
  - 本 (六ヶ旬語会誌、和英事典(復刊)、~~...~~、~~...~~、ヨーロッパ全域の地図)
  - ガイドブック、時刻表、~~...~~
  - カメラとフィルム 2ヶ付属品
  - ① 懐中電灯
  - 錠マイ (スペアキー-I)
  - ビニール袋
  - 雨具 (カサとカッパ)
  - 薬 (セロ丸、リパター、和ナイン、~~...~~、ホウタイ)
  - おみやが (鉛筆かきと~~...~~)
  - ウチシ?
  - マッテ
  - ハンカチ
  - ナリ紙
  - コップ
  - 1200 ナック
  - 3000 ナック
  - ~~...~~
- 下着変え時!

携行品のチェックリスト

## 六 博多〜東京

四月十七日、博多駅から新幹線で東京へ向かった。ナホトカ行きのパイカル号は横浜港を十九日に出発するが、そのツアー参加者へ対して横浜港の近くのビルで開かれる直前の説明会に参加する必要があった。そのため東京で二泊した。母の妹弟の多くが東京近郊で生活していたので、一番年齢の近いK叔父のアパートに泊めてもらうことになっていた。叔父から夕食をごちそうしてもらった。ウナギの頭のかば焼きを食べたこと、叔父のアパートが線路沿いであり（東馬込、横須賀線のそばだったと思われる）列車が通過する音が大きかったことを覚えている。少し寂しく、不安も感じた夜だった。説明会の様子は記憶に薄いが、ツアーメンバーは合計二十二名であった。

次の日は、大学時代の友人二人が既に東京で働いていたので、落ち合つて夕食を共にすることとした。友人二人が私の旅路にエールをくれたことを思い出す。



博多駅で



東京でY君と



東京でY君とK君

7 見送ってくれた友人はY君とK君。この二人は私より大学に近いところの同じ下宿にいた。よく遊びに行つた。Y君は私よりもビートルズのレコードをたくさん（しかもLPレコードのすべて）を持っており、リクエストに応じて聴かせてくれた。キャロル・キングも教えてくれた（アイヴ・ゴッタ・ア・フレンド）。学生時代の至福の時であった。先に記したH君とY君が私の結婚の披露宴での司会をやってくれた。